自閉症の子どもの指差しに関する試論的考察
―新しい自閉症理解を目ざして―

柴　田　保　之

はじめに

斉藤こずゑさんのご退職の記念号となる本号には、ぜひとも執筆をさせていただきたいと考えてきた。それは、学生時代からご指導をいただき、その後この教育学研究室の後輩として、長年にわたってお世話になってきたからである。

本稿はタイトルに示した通り、新しい自閉症像をあきらかにする試みである。それは、いまだ、専門の領域ではその常識に真っ向から反するものであるが、こうした考えをいだくにいたった私の歩みは、この教育学研究室にたくさん支えられたものだった。まずは、その経緯から簡単に述べるところから始めたい。

私が大学３年に教育心理学科に進学して、障害児教育の勉強を始めたのは、1979 年のことで、それは養護学校義務制実施の年にあたる。当時、私の大学では障害児に関する講義が開かれていたのは、教育心理学科のみであり、それがその学科への進学理由だった。そこで、障害について専門的に学ぶためには、障害に関することはもちろんのことだが、発達に関してしっかりと学ぶべきであることが少しずつ自覚されていった。

その頃、養護学校義務制を支える思想として発達保障思想というものがあり、どんなに障害が重い子どもでも同じ発達の道筋を歩むという考えが広く知られていて、発達を専門的に学ぶことが、障害児を理解する上できわめて重要であるとされていたのである。発達のメカニズムを解き明かすことが障害児の教育にも役に立つということと、特に障害の重い子どもについては、乳幼児の発達のメカニズムの解明が重要であるという考えのもと、難解なピアジェの乳児研究を細々と読み進めたり、大学院生がチューターとなる特殊実験という授業では、斉藤こずゑさんらが取り組んでいた乳児の発達の研究のグループでご指導を受けるなどしていた。

一方、当時、自閉症の研究がさかんになり始めた時代でもあった。「テレビが自閉症児を生む」というようなまちがった考えが語られたりした時代のあと、自閉症は明確な障害として研究の対象となっていたのである。そして、同じ発達の道筋をたどるだけでは説明がつかない自閉症の様々な特徴について、数々の研究が積み重ねられ始めていた。自閉症の講義を担当の講師の先生が、ご自身の関わりをもとにしながら、「ほんとうに自閉症の子どもはわからない」と首をひねりながら、講義をしていた姿も忘れられない。そして、それから、自閉症児は、多くの子どもたちとどこが違うのかを解明するための努力が重ねられ

ていく姿を私も見続けてきた。

ところで、私が師事した中島昭美先生（1927 ～ 2000）は、重度･重複障害児に対し、きわめて実践的な研究のスタイルをとっておられ、私自身の研究スタイルも、そうした子どもたちに対する実際の教育的な関わり合いをもとにしたものとなったので、発達そのものを研究することや自閉症とは何かを実験的に追及することはなかったが、発達心理学の新しい知見や自閉症研究の動向には、それなりの目配りを行ってきた。

私が実践的な研究のスタイルを選び、大学院を終えてすぐに就職したのが本学教育学研究室であったのだが、当時、障害児の教育とは無縁と言ってもよい本学に、教育心理学関係の講義を担当するということで就職した私が、本学でどのように自分のスタイルを貫いていけばよいのか、見通しがそれほどあったわけではなかった。それでも、学外に研究の拠点をおいてがんばればいいだろうと考えて、本学の一員としての歩みを始めた。ところが、本学の教育学研究室には、教育実践や様々な社会問題への熱い視線をいだいた先生方が多くいらっしゃり、私はひたすら圧倒された。教育心理学の枠の中ではずいぶん異端な場所にいると思っていたのだが、むしろ、自分の実践研究のスタイルをもっともっときわめていかないと、この教育学研究室ではやっていけないとの思いをいだくようになった。そして、それは、私にはとてもありがたいことだった。狭い学問の枠組みの中にとどまるのではなく、実践の現場や様々な社会問題の現場にこだわることに大きな価値が置かれた教育学研究室のおかげで、私もまた、障害児教育の現場や当事者の立場にこだわり続けることができたのだ。

そういう歩みを続ける中で、私は、二つの事実に出会った。一つは、知的障害とは、発達の遅れによるものではなく、外部への表現過程に関する障害であり、内面には年齢相応、もしくはそれ以上の言葉が存在しており、自閉症者もまたその例外ではないということ。もう一つは、東田直樹さんをはじめとする自閉症の当事者自身の発言により、その内的な世界は、専門家によって描き出されてきた自閉症児・者の内的世界のイメージとは大きくくい違っているということである。

そして、こうした事実に出会うことを可能にしたのは、「介助つきコミュニケーション」と呼ばれる方法だった。（この呼び名は、当事者の間で使われるようになったものだ。）これは、今日もなお議論の多い方法で、相手の手に私の手を添えるなどの身体接触を伴う援助を基本としているため､それが本当に本人の意思であるかという議論が続けられている。

本稿では、その方法についての議論は省く（詳しくは柴田（2015）など）が、そこから見えてきた事実をもとに、自閉症についての新しい考え方の中から、指差しをめぐって立てられた一つの仮説を述べてみたい。

1．自閉症児と指差しをめぐって

（1）指差しの成立の一般的なプロセスについて

自閉症児が指差しが苦手であることは、広く知られている。指差しという行為自体が、通常の状況ではどの子どもにも現れるものであるから、この行為自体を生得的に備わったものと考えることもできるが、生得性についてその出現の頻度以外に説得的な説明があるわけではないので、これを経験の中で作り上げられたということもまた可能である。

すでに数多くの研究がなされている指差しであるが、この出現のプロセスについて、大雑把には次のように述べることが可能であろう。

まず、出生後、新生児は母親を中心とした周囲の大人とアイコンタクトをする。そして、おそらく、人の目を見るのが苦手と言われる自閉症は、新生児の段階から、何らかのかたちでこの経験が制限されていると考えてよいだろう。

アイコンタクトについては、選好刺激の研究などから、目のように配置された図形を新生児が特に好むという研究もあるので、生得的なものとする議論も成り立ちうるだろう。生得的という立場をとらないことも可能だが、目下のところ、その行動に先立つ行動を想定するには、胎児の経験を問題にしなくてはならず、そのことについての議論は、私の力に余るので、ここではこれ以上立ち入ることはしない。

このアイコンタクトは、次に、共同注視と呼ばれる現象へと発展する。乳児が大人の見ている方向や物に自分の視線を向けるという現象である。アイコンタクトから共同注視への発展は、そこに意図に対する理解が介在していなければ、説明はつかない。目を見るということを新生児が好んだりしても、そこに意図の理解がなければ、視線の先への関心は生まれにくいと考えられるからだ。

共同注視が生まれると、その視線の方向に込められた意図を指先が表現することによって、指差しへと発展すると考えることができる。普通、対象を提示しても、それに対する注視は生まれても、それが何かの方向を指し示すということは考えにくいから、指差しというものが特別な性格を持っていることがわかる。

このことは、共同注視が成立していなければ、指差しが自然な発展として生まれることはむずかしいことを表しているとも言え、自閉症児が指差しが苦手な理由として、アイコンタクトが苦手なために共同注視にも困難があるためだと言うことが可能となる。

共同注視の段階で、すでに子どもは自分の意図を他者に伝えるという経験をしている可能性もあるが、指差しを通じて、自分の意図を確実に他者へ伝える経験を獲得すると言ってよいだろう。

言語の発達に先立ってこうした意図の伝達の手段を獲得するということは、コミュニケーションの土台にこうした行為レベルでのコミュニケーションが存在しているということになる。実際私たちのコミュニケーションは言葉以外のノンバーバルコミュニケーションによって司られており、そこに様々な個人差があるらしいことは、いわゆる「空気を読

む」ということをめぐる日常的な議論の中によく表れている。そして、しばしば自閉的傾向とそのこととが関連づけられて語られることも少なくない。

指差しに代表されるノンバーバルなコミュニケーションの問題が、その後のコミュニケーションの発達に深い影響を及ぼすであろうことは、想像にかたくない。しかし、これは、けっして、共同注意や指差しといったものがその後の対人関係において必須の条件であるということにはならないだろう。

（2）視線を中心としないコミュニケーションの可能性

アイコンタクトから共同注視、指差しへと至る過程が、自閉症と呼ばれる子どもたちに何らかのハンディがあることは、間違いないと言ってよい。しかし、これは、別のかたちでの対人関係の成立の可能性まで否定するものではない。視線を中心とするコミュニケーションとは違うコミュニケーションのかたちがあってよいはずなのである。

東田直樹さんの著作『自閉症の僕が跳びはねる理由』では、視線については、「どうして目を見て話さないのですか？」という節において、次のように述べられている。

> 僕たちが見ているものは、人の目ではありません。「目を見て話しなさい」とずっと言われ続けても、僕はいまだにそれができません。（…）
>
> （…）僕らが見ているものは、人の声なのです。声は見えるものではありませんが、僕らは全ての感覚器官を使って話を聞こうとするのです。相手が何を言っているのか聞き取ろうと真剣に耳をそばだてていると、何も見えなくなるのです。目に映ってはいますが、それは何かを意識できません。（…）
>
> 僕がずっと困っているのは、目を見ていれば相手の話をちゃんと聞いていると、みんなが思い込んでいることです。目を見て話すことができるくらいなら、僕の障害はとっくに治っています。（東田、2007；pp.34-35）

ここに述べられていることは、まず、会話におけるアイコンタクトのむずかしさであり、これは、生後すぐのアイコンタクトがとりにくかったことから続いていることと考えてよいだろう。そして、東田さんは、私たちが「目を見ていれば相手の話をちゃんと聞いていると、みんなが思い込んでいる」とだけ述べているが、これは、私たちの多くが目を見ていなければちゃんと聞いていないと思い込んでいるということでもある。

私は、多くの専門家もまた、この素朴なレベルで、自閉症を勘違いし、そこから議論を積み上げているように思えてならない。

私自身も、もちろん視線の合わない自閉症のお子さんや大人との関わりの中で、相手が目を見てこないときに、話がうまく伝わっていないかもしれないとの思いは抱いたことがある。しかし、それは、コミュニケーションの欠如を意味しているわけではなかった。単に、目と目を合わせて会話するコミュニケーションがうまくいっていないだけであり、そ

れ以外にコミュニケーションはとれているはずだという確信があった。

実際、こちらがどのような思いで接するかによって自閉症と呼ばれる人々の対応は、明らかに変わる以上、私たちの気持ちは伝わっていると感じざるを得なかった。

また、私たちは、例えば、教材を介する関わり合いもまた、一つのコミュニケーションのかたちだと考えていた。実際、こちらが教材を提示すると、それに応じて相手が行動を起こすというのは、一つのコミュニケーションのかたちとして、通じ合った実感をたくさん私たちにもたらすものであった。

さらに、自閉症の方と散歩をしたり、ただ何もせずに座っているときに、不思議な安らぎを感じることがあった。それは、視線によるコミュニケーションは、たえず気を遣い合うという側面を持つのに対して、視線によるやりとりを必要としない関係は、気を遣わない分だけわずらわしさがないからだと考えるようになっていった。もちろんそれはコミュニケーションがないということを言いたいのではなく、視線を介さないコミュニケーションが土台にあることを大前提としたものだ。そのような穏やかさを感じる時は、もちろん相手も穏やかな雰囲気を漂わせている時で、それは、私を受け入れてくれているという実感につながっていた。相手から視線や言葉として返ってくるわけではないから、独りよがりかもしれないという思いは常にあったが、その実感の方が重要であると考えていた。こうしたことを自覚するようになったのは、「心の理論仮説」などが喧伝されるようになり、改めて、自閉症の方々との心の交流の意味を再確認する中で自覚されたものだったし、このことをもって、私は、その仮説を絶対に受け入れることはできないと強く考えたのである。

また、ある自閉症の小学生の女の子は、自分の双子の弟をめぐる次のエピソードをめぐって興味深いことを述べた。それは、この弟が祖母のところに一人で泊まりに行った際に、お母さんとの電話では満足できず、テレビ電話での対面を求めたのだが、その弟のことを「視線依存だ」と言ったのである。そして、自分は母と離れていても、母が自分のことを思っていることはわかっているから大丈夫だと言い、ショートステイ等で母と離れたりする場面で、多くの子どもは、去っていく母の姿を追うように見るのに、そういう場面では、母の姿を追い続けることなく、そっけなく別れるというのだが、母が自分のことを思っていることはまちがいないし、自分が母のことを思っているのはまちがいないから、別のそれでかまわないと言うのである。

これは、まさに、視線によるコミュニケーションが常態となっている私たちの姿を相対化するものであり、視線によらずともコミュニケーションが可能であるということを示唆するものだと言えるだろう。

このような事実をたどっていくと、自閉症児が視線によるコミュニケーションが苦手であることから、人に関心がないとは言えないことをはっきりと示しているのである。

2．指差しの成立のプロセスと視覚的処理

（1）視覚の同時的処理と経時的処理

ここで、いったんコミュニケーションの問題を離れて、注意の共有から指差しにいたるプロセスと視覚という問題を立ててみたい。

いささか唐突だが、iPad 等のタブレット端末の登場以来、聞かれるようになったエピソードについて述べたい。それは、障害のある幼児の中に、画面上に並ぶアイコンの中から YouTube のアイコンを選択し、すごいスピードでスクロールして好きな動画を探し出す子どもがいるというものである。私自身、何名もの障害のある幼児がそのような操作を行う場面を目撃してきた。これは、従来、好きなものをすぐに探し出すという行動でも知られていたものであるが、タブレット端末の登場によって、その能力がより鮮明になったと言える。

一方、そのような能力を示すことができるにもかかわらず、明らかにそのカードの意味を理解しているのに、2 枚のカードの選択には失敗するというエピソードがある。これも私自身障害のある子どもたちとの学習の中でいくどか体験してきたものである。

この二つのエピソードは、理解ということから考えると奇妙な現象である。わかっているのであるならば、タブレット端末のアイコンの配列からの選択であろうと、2 枚のカードからの選択であろうと、同じように選べてもよいはずだからである。

したがって、理解とは別の説明を考えなければならない。そこで、可能性として挙げられるのは、視覚の処理の問題である。

人間の視覚の処理は、私たち自身の体験を振り返ってみると、次のような過程を含むことがわかる。群衆の中で知人をたまたま見つけるという場面を考えてみよう。もし意識的に探すのであるならば私たちはキョロキョロと探そうとするが、これは、一人一人の顔に順に視線を向けていく経時的な処理になる。ところが、たまたま見つける場合は、まず無意識的に見ているところに、知人らしき人がいるような気がして、そちらへと目を向ける。いったん目を向けてからは、経時的処理となるが、無意識的に知人の存在に気づく際の視覚の処理は、同時的であると考えられる。このような視覚の処理について、本稿では「視覚の同時的処理」と「視覚の経時的処理」と呼ぶことにする。ただし、この用語は別の使い方もされる用語でもあるので、あくまでも、暫定的な呼び方である。

このことを踏まえてもう一度、タブレット端末のアイコンの選択について見てみると、その選択を支えている視覚の処理は、同時的な処理であり、2 枚のカードの選択を支えている視覚の処理は経時的な処理で、そのことがこうした現象の背後にあると考えてみることはできないだろうか。

タブレット端末のアイコンは、画面上に複数のアイコンが並んでいるわけだが、同時的処理というのは、一つ一つのアイコンを注視する前に、アイコン全体を見て、その中から選びたい一つのアイコンへ向かって注意を向ける。この時、特徴的なのは、その素早さで

あるが、おそらく、注意を向けるという行為とそれにむかって指を伸ばすという行為は、ほぼ一体化して起きているものと考えることができるのではなかろうか。

それに対して２枚のカードの選択が困難であるとはどういうことなのだろうか。素朴に考えれば、２つの選択肢の選択もまた、同時的処理で解決できるはずだが、なぜ、そうはいかないのだろうか。

二つの選択肢を見るというのは、すでに、同時的に見た全体の中から二つの対象を抽出するというプロセスを経なければならないわけだが、同時的な処理によって全体から二つを抽出するということは、案外むずかしい。

同時的処理というのは、例えば、部屋の中からタブレット端末を見つけて手にする、手にしたタブレット端末の画面からアイコンを見つけるというように展開して行くのだが、これは、全体を同時的に見た中から一つの対象を抽出するというプロセスになっている。それに対して、二つの対象を抽出するというのは、全体から一つを抽出したあと、改めて二つ目の対象を全体から抽出するということを行った後、この二つ目を見比べなければならないため、どうしても経時的処理が必要なのである。

この時、例えばその子が好きな物と別の物を提示して、その子が好きな物を選んだ場合、形式上は二つの対象からの選択になるが、この時は、二つの対象を選択した上で改めて一つを選んでいるのではなく、同時的にとらえた全体の中から一つを選んでいるに過ぎず、二つの選択肢から一つを選んだわけではない。

二つの選択肢とは、選択肢という意味では全体から区別される等価なものともいうことができ、その等価な二つの選択肢の間で改めて違いを区別することになるわけなのである。このことは、２枚のカードの選択ならばわかりやすい。まず、全体の中から等価な２枚のカードを抽出し、その上で２枚のカードの違いを比較するというわけである。

この時、子どもがカードを選ぶことはわかっている場合、次のようなことが起こると考えられる。すなわち、同時的処理によって、カードの存在に気づいて、２枚のうちの１枚を選択した時、それはカードとして選んだのであって、カードに記されたものに着目したのではなければ、改めてもう１枚のカードを選び出さなければならない。しかし、同時的処理は、それを注視するとともに運動もまた起こってしまうので、もう１枚のカードを抽出することなく、最初に注視したカードを選んでしまうというわけである。そして、それが求められたカードでなければ、間違いということになる。

そして、理解できていればその運動を止めることができるというふうに通常は思われているので、理解できていないと見なされてしまうのだが、理解されていても、運動を止めることができなかったり、不確実であったりするということがあるのである。

（２）視覚的な選択をめぐる中島昭美の考察

こうしたことについては、子どもたちとの具体的な関わり合いの場ですでに問題とされていたことであり、中島は、こうした現象について、以下のように述べている。

一般に言われているいわゆる動く重症児も、視覚に生理学的な障害がないのに、その視覚の使い方が初期の状態にとどまり、ヒトとしての感覚として成立せず、そのため、行動水準が高まらないまま意味もなく動きまわってしまう。よく動きまわるので、視覚障害があるとは言えないし、視覚障害をもつ子供達が一般に動きが少ないのに比較して、ともかく敏速に行動できることはうらやましいとも思える。その動きはすばやく、次々と行動が変化し、ものにぶつかったり転んだりしないので、いかにも視覚を十分に活用しているようにみえる。そこには、視覚の問題が何らないように思うかもしれない。しかし、すばやく起こる行動は、視覚を使って運動を自発しているのではなく、ある特定の刺激が一瞬見えたことがきっかけとなって、その刺激に一方的に引きずられているパターン化した受動的固定的運動にすぎない。又、次々に起こる行動の変化は、いかにも全体を見渡して選択的に反応しているようにみえるが、運動を起こすと視線がそれ、最初に見えた特定の刺激から次の別の刺激へと引きずられて起こす変化である。確かにぶつかったり転んだりしないので、目を上手に使って注意深く行動しているように思えるが、実は目の使い方が受動的固定的で、探す、見つける、見比べる、確かめるという目の使い方をしないので、すばやく動いても、普通の子供のようにぶつかったり、転んだりして怪我をしない。つまり、周囲の刺激に対して受動的に適応し、積極的能動的に働きかけないので、かえって危険を生じない。（中島、1977；p.15）

ここでは、同時的処理として述べてきたことが、「受動的固定的」な行動に対応し、経時的処理として述べていたことが「積極的能動的」な行動と対応しており、その受容に基づいた行動の特徴が分かりやすく述べられている。この文脈では、そうした行動が否定的なニュアンスで述べられているが、これは、教育的な関わり合いを前提とする中で、これらの行動をいかに「積極的能動的」なものへと高めていくかという中で述べられているもので、けっして突き放した記述ではないことはことわっておきたい。

さらに中島（同）は経時的処理である見比べるということについて、次のように述べている。なお、ここでは二つの対象ではなく、見本合わせという状況における三つの対象の見比べについて述べられている。

同じ、違うということは、学習の初期においては単なる分類であり比較であるが、それがしだいにある基準を定めた比較とならなければならない。どちらが長いか短いかというだけでは単なる比較に終わってしまう。まず、これと同じものとして選び、その同じものと比較して違うものが長いか短いかという二方向への分化が納得されなければならない。単なる比較であれば、目の使い方は二つの比較するものを直線的に見比べればよい。しかし、基準による方向づけをもった比較の場合は、見本と選択肢の少なくとも三つの見比べを必要とする。まず、見本を見て、次に選択肢を見比べ、直ちに選択せず、

もう一度見本を見直して、見本と同じ選択肢を選ぶのが見本合わせ法であり、基準づくりの出発点でもある。いわば、直線的な動きから三角形の動きへと変化することであり、左右の端からまん中が出ることである。子供がお皿に載せてあるお菓子の大きい方や数の多い方を選ぶのと、見本合わせ法により同じものを選ぶのとは、直線と三角の違いである。（中島、1977；pp.46-47）

やや、長い引用となったが、選択に関わる行動において、同時的処理が「受動的固定的」なすばやい選択であり、見比べを伴う経時的処理が、「能動的積極的」と呼べるような違いを持ち、いくつかの経過の中でしだいに成立していくことと、その処理自体が複雑なプロセスから成り立っていることがわかる。

そして、こうしたことが容易には獲得されない場合があって、そのための学習が必要であるということもわかるだろう。

（3）視覚の同時的処理と経時的処理をめぐる仮説

ここで、話をもう一度、自閉症の子どもにおける同時的処理と経時的処理の問題に話を戻し、いったん両者を受動的―能動的という価値づけをいった脇に置き、等価なものとして議論を進めたい。そして、以上のことをふまえた上で、いささか大胆な仮説を立ててみたいと思う。

それは、経時的処理は、アイコンタクトに始まり共同注視から指差しへと発展するプロセスの中で発達していくが、そのプロセスにハンディを持つ自閉症の子どもにおいては、その時期に、同時的処理が発達していくというものである。

自閉症の子どもが領域によってはすぐれた能力を示すことは、よく知られているが、その能力は暗に先天的なものと見なされていることが多い。もちろんその可能性は、否定できないが、それが獲得されたものだという仮説もまた成り立ちうるはずで、ここではそうした可能性に目を向けるということになる。

この仮説には、強い根拠があるわけではなく、以下に述べるようないくつかの事実が、その可能性を示唆したものだ。

まず、経時的処理について、すでに中島が述べたように、そうした処理が学習の結果としてもたらされるという経験を私たちはしている。たとえば、私たちは、障害のある子どもたちとの関わり合いの中で、順序づけということを重視し、例えば、5本の棒を横一列に並んだ穴に端から順にさしていくというような課題を行ってきた。そして、最初は、目についたと思われるところにさすところから始まって、順番にさすことができるようになるには、いくつかのプロセスがあることが知られている。

これは、手の操作と絡み合いながら経時的処理がたくみになっていくことの事実であるが、多くの乳幼児もまた、こうした経験をどこかで経るものと考えられる。そして、その際、アイコンタクトから指差しへ至るプロセスが、そうした経時的処理を促進している可能性があるのではないかと考えることができると思われるのである。

アイコンタクトにおいては、見る対象は、目は二つだが、二つの目を交互に見比べるというよりも、顔という一つの対象を注視していると考えてよいだろうから、対象は一つだが、共同注視が成立すれば、相手の視線の移動によって複数の対象間の視線の移動というのが起こる可能性が出てくる。このプロセスについては詳しくわからないが、それが指差しへと発展した段階では、明らかに、対象は、二つ以上になり、指さす順番に視線を移動していくということが起こってくる。こうしたプロセスが、視覚の経時的処理を促進するのではないかということである。

一方、そういうアイコンタクトから指差しへのプロセスの経験が不足している自閉症児については、次のように考えられる。すなわち、そうした経験が欠如しているということは、それに代わる何らかの経験がなされていると考えることもでき、その代わる経験として同時的処理の促進が起こっているというふうと考えることができれば、自閉症の幼児の同時的処理の巧みさの説明がつくのではないかということである。

同時的処理については、速読や周辺視野のトレーニングと言われるもので問題とされている能力と重なる部分が大きいと考えることができるわけだが、それは、こうした能力が習得されるものであることを示唆しており、自閉症の乳幼児がこうした経験をしているという可能性へとつながるものである。

もちろん、この仮説は考えられうるものなかの一つに過ぎないかもしれない。だが、私としては、仮にこの仮説が間違っていたとしても、経験の欠如だけを見るのではなく、その代わりに別の経験をしているという発想を常に持ち続けていたいと考えており、欠如のみをあげつらう発想は、自閉症理解や障害理解においては、誤ったものと考えているので、こうした発想にはこだわっていきたいと考えている。

（4）Ｔ君の指差しの始まり

ここで、こうした視覚的な同時的処理から、指差しを獲得するによって経時的処理が可能になったある自閉症児Ｔ君との関わり合いのことを記しておきたい。

Ｔ君は、4歳の時に研究室を訪れ、就学まで月に2回ほどのペースで通ってきた。特別支援学校に入学後は2, 3か月に一度というようなペースになったが、継続的にかかわりを続けてきた。そのＴ君が小学2年生も終わろうとする2018年3月9日に、指差しをめぐってたいへん興味深い行動を示した。

この日、お母さんは、学校の先生からＴ君に指差しについて話があり、指差しができるようになったらよいということと、高いところに好きな物を置くところから指差しにつないではどうかということを言われたとの相談があった。私自身には、指差しができるようにＴ君に働きかける目途は立っていなかったので、Ｔ君とお母さんに対して、これからゆっくり一緒に考えていこうという意味をこめて、とりあえず、多くの子どもたちがたどるアイコンタクトから共同注視、そして指差しへと至るプロセスについての私の仮説を説明し、さらに、Ｔ君はいっぺんに全体を見て、そこから物を選び出すことが多いが、自然と指差

写真１－１

写真１－２

写真１－３

写真１－４

写真１－５

写真１－６

しを始める子どもたちは、選ぶものを順に指さすようにして選んでいると考えられるということをていねいに説明した。

すると、Ｔ君は、突然、指差しを始めたのである。この最初の指差しは映像にとれていなかったので、何をどのような状態で指さしたのかは記録に残っていない。

しかし、突然指差しを始めたことに驚いた私は、すぐにビデオ撮影を開始した。最初に映っている指差しの動画から、６つの静止画像を選び出したのが写真１－１から写真１－６である。手前は母親で、ひらがなが書かれた一辺2.5㎝のタイルをＴ君の眼前に提示している。

これに対してＴ君は、まず、左手の人さし指で左のタイルを指差し（写真１－1)、次に

右のタイルを指差し（写真１−2)、いったん手を下ろした（写真１−3)。

この間の視線は、写真１−1、写真１−2では、ややあいまいだが、文字タイルを注視してはおらず、写真１−3では明らに右端に黒目を寄せた状態であり、動画で見る限りでは、写真１−１−1、写真１−2と写真１−3の目の動きは連続的で、同じ状態であったというように見えた。この視線では文字タイルを注視はしていないが、この見方の中で、左の文字タイルを指さしてから右の文字タイルを指さしているのである。これは、同時的処理の際の視線と言ってもよいかもしれないが、右手は左の文字タイルから右の文字タイルへと経時的な処理を行っているのである。

写真1−4では、今度は、上半身を右に傾けて黒目は左端に寄せている。これは、写真1−3と黒目をよせるという点では同一だが、左右が入れ替わったということである。そして、体を傾けた理由はタイルをよく見ようとしているのではないかと考えられる。

そして、写真１−5では、その見方はやめて、再び、上半身をもとに戻し黒目を右端に寄せているが、前と違って今度は視線の先に右の文字タイルがあるようでもある。もし視線の先が右の文字タイルにあるとするなら、それは偶然なのか意図的なのかはわからないが右の文字タイルを注視したかのようでもある。

そして、その見方の中で今度は両手で同時に左右両方の文字タイルを指さしている。この時、視線の先にあるように見える右の文字タイルにのみ右手を伸ばせばいいようにも思える。しかし、両手を伸ばしているということは、二つの対象を意識しているということでもある。ただし、この見方の中で両者がとらえられていたのかはわからない。

また、指差しを行うときに、「どっち、どっち」と声を出していた。これは、ふだん出すことのない声で、二つの中から一つを選択するという意識の現われであると言ってもよいだろう。

この日Ｔ君が然起こしたの指差しに関する行動は、行動ごとに多様で、それらすべてを検討しなければ十分とは言えないが、ここでは、この一つの行動の中に示されている重要な点を整理することとしたい。

まず指差しの行動であるが、二つの選択肢のいずれかを指差しで選択するということは、それができあがった状態では、二つの選択肢を見比べてから、選ぶ方を決め、そちらを指さすということになる。だが、その視線の移し替えに先立って、二つの選択肢を指さすことによって周囲の様々な対象から浮き上がらせて対象化するということがあって、初めて二者から一者の選択というものが起こるのであるとすると、Ｔ君が示した左のタイルから右のタイルへと指差していく行動は、それにあたると言えるのではないだろうか。

そして、そのあと、両方のタイルを指さした行動については、上述の二者の対象化を同時に行ったとも考えられるし、一つの選択を行うところを、両手が同時に動いてしまったとも考えることができる。そのいずれかを決めるには情報が不足しているが、どちらであっても、Ｔ君が二つの選択肢から選択するということにとって必要なことを行っていると考えることができるのである。

次に、視覚についてだが、ここでまず注目しておきたいのは、視線が対象にしっかりと向けられるという意味での注視が少ないこと、そして、注視を別の対象に向けるために視線を移動させるということもまた少ないということである。同時的な処理をしているからこれで十分と考えるのか、そうした視線の移動のむずかしさが一つの原因となって、同時的処理を促進しているのか、いずれもありうるが、決め手はない。

私はロックトインシンドロームと呼ばれるような全身の動きが制限されてしまった方とのコミュニケーションの中で、眼球運動が困難になったため、それを補うように周辺視野を使えるようになったと述べる姿に幾度か出会ってきた。それをここにそのままあてはめれれば、後者の考え方になる。だが、ここではこの指摘だけにとどめておきたい。

いずれにせよ、T 君が、右端によせた黒目を左端に寄せ、かつ、その眼球の状態で対象をとらえやすいように姿勢を変えているという事実は、二つの対象を経時的に処理するための T 君自身の試行錯誤があると見てよいのではないだろうか。

（5）指差しの成立に対するもう一つのプロセスの意味

以上、アイコンタクトから共同注視、共同注視から指差しへといたるプロセスが、多くの子どもに対して視覚の経時的処理を促進するのに対して、自閉症の子どもは、そのプロセスを経ない代わりに、視覚の同時的処理を促進させるという仮説について述べ、そして、指差しができなかった自閉症の T 君が、意識的に指差しを行おうとした事実を述べてきた。

これらは、コミュニケーションという文脈で整理しておくと次のようなことが言える。

まず、自閉症の子どもにおいては、多くの子どもたちがたどるアイコンタクトから指差しにいたるまでの道筋とは別の道筋が存在しているということである。ここについて、従来は、自閉症の子どもにおいては、指差しにいたる道筋の欠如のみが語られることが多かったが、そこにはきちんとしたプロセスが存在しているのである。確かに、多くの子どもとの比較においては欠如になるが、自閉症の子どもの中では、一つの完結した世界と言ってもいいかもしれないからだ。このことは、間接的にではあるが、その完結した世界には完結した世界独自の人間関係というものが存在しているという考えをより自然に導くのではないだろうか。

次に、指差しにつながるプロセスと自閉症の子どものプロセスとの間を架橋することは可能だということである。T 君が自らの意志で指差しを始めたわけだが、これは、多くの子どもたちのたどった道筋と自分のたどった道筋とを比べた上で、指差しによる意思を伝えるというコミュニケーションの方法の利点に気づいたがゆえに生まれた行動だったと考えられる。私たちは往々にして上から見下すようにして、その子の欠如した部分が補われるような行動の習得を押しつけようとする。しかし、ここで起こっていることは、それとはまったく違うことである。子ども自らが、自分の判断で、自分にとって意味があることだからこそ始めたことなのである。

かつて T 君は、「ぼくのしょうがいはかんたんにはふつうにはなれませんが　それでも

がんばっていまよりもかわっていきたいとおもっています　でもそれはみんなとおなじようになるためではなくて　もっとぼくらしくなるためです」（2015 年 7 月 13 日）と介助つきコミュニケーションによって書いたことがある。T 君にとって指差しは、自分の気持ちがもっと伝わる方法をみずから求めることによって生まれたものである。中島の文章の引用をする際に、「受動的固定的」と「積極的能動的」という表現についてふれたが、ここでは、T 君自身が、より積極的な受容を求めたということができる。すなわち、T 君自身がその二つの処理様式に主体的な価値づけを行い、経時的処理の方法を選び取ろうとしたということなのである。

3．自閉症児のコミュニケーションと対人関係―心の理論仮説の疑問―

以上の考察を経て、ふたたびコミュニケーションの問題に立ち返るが、こうした指差しをめぐる対人関係の問題は、近年、「心の理論仮説」の文脈で語られることが多い。心の理論を自閉症と結びつけ、自閉症児には心の理論に欠陥があると述べたのは、S. バロン＝コーエン（2002）だが、この議論には、決定的に欠けていることがあると言わなければならない。それは、すでに多くの論者も述べていることだが、「心の理論」の獲得について自閉症児が欠如ないし遅れを持つということが確認されたというのは、あくまで、「誤信念課題」の成績に基づいたものであり、そこから自閉症児には「心の理論」の獲得が困難だったり遅れたりするというのは、あくまで、推測であるということだ。

「心の理論」については、東田直樹さんは、次のように述べた。

> 僕は「心の理論」の検査として、「サリーとアンの実験」を用いることは、重度の自閉症に対しては、ふさわしくないと思っています。
>
> なぜなら、正解がわかっていても、答えを口で言ったり、上手く指し示したりすることができないためです。そのうえ、僕のような自閉症者の場合、最後の質問の「ビー玉」「どこ？」という単語が頭に残り、質問者にビー玉を手渡したりする課題と勘違いしてしまいます。（東田、2016；p.34）

この当事者からの反論に真正面から答えない限り、自閉症児の「心の理論」に関する議論はすべきではない。

また、「心の理論」については、奇妙な現象がある。それは、「心の理論」と自閉症について語る日本の研究者は、「と言われている」という表現を多用しながら心の理論について語るということである。それは一見誠実な態度にも見える。

しかし、「心の理論」は、現場では、「このお子さんは人の気持ちがわかりません」という言説を多数生んでいる。「と言われている」と記したことがいつのまにか正しい考え方として一人歩きしているのではないだろうか。私は、この事実については、当事者とその親

から聞いたものであるが、そういう言葉を平気で口にする人たちは、それが、相手に対する大変な侮辱になっているとことには思いが及ばないのだろう。

「心の理論」仮説の提唱者、バロン＝コーエンについては、次のような文章がある。

報道によるとバロンコーエン教授は次のように語ったという。

「仮に自閉症の出生前診断があったとしましょう。それは望ましいことでしょうか。自閉症スペクトラムのある子どもが一切いない社会ができたとして、私たちはそれによって何かを失わないでしょうか」。彼は次のように続ける。「議論を始めるべき時がきたのです。すでにダウン症のための検査は存在しています。それは合法で、人工中絶を選択する権利が普通に行使されています。けれども、自閉症の場合は才能と結びついているのです。ダウン症とはまったくもって条件が異なるのです」（K・スミス、2018；p,34）

ダウン症者と自閉症者の間にこのような線引きができる人ならば、自閉症者は人の気持ちがわからないという予断があっても無理からぬことかと思う。彼がどのような発言をするかは自由であるが、「心の理論」仮説に最初から違和感を感じた者にとっては、この発言はつじつまのあうものであった。私は、「心の理論」仮説を支持する研究者、そして、「と言われている」と引用する研究者に対しては、皆さんもまた、ダウン症と自閉症の間にこのような線を引きますかと問いたいと思う。

最後に、T 君の次のエピソードを紹介して、この稿を終えたいと思う。それは、2015 年 8 月 24 日のことだが、ある場所で話をすることを求められていた私は、手を添えて行う筆談の実際の映像がほしかったので、T 君に、そのための映像をとらせてもらいたいとお願いした。

写真 2－1、写真 2－2 は筆談（筆記用具を用いていないので指筆談と呼んでいる）で文字を綴っている場面で、座っていることもあれば立っていることもある。そして、こうし

写真 2－1

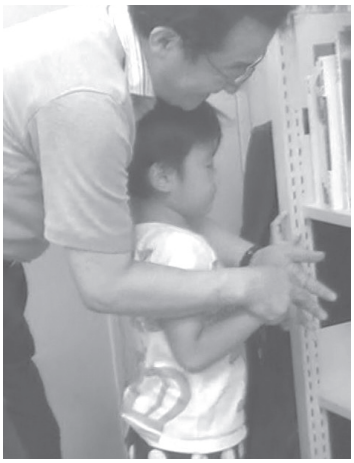
写真 2－2

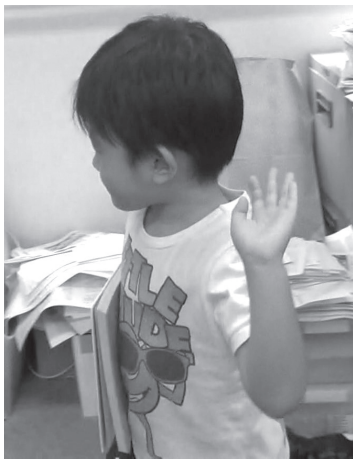
写真 2－3

てつづられた言葉は、次のようなものだった。

「ぼくのことばをみんなにつたえたいですが　てでかくところをみてください　みんなもかけますよ」

私は、ふつうの日常の会話の一部を録画したいと考えていたので、まさか、その映像を見る聴衆に向けて語り掛けるとは思ってもみなかった。私の意図やその映像を見る人の意図に応じてこうした言葉が綴られたということは、他者の意図を推測する「心の理論」を持ち合わせているということになる。

しかも、T 君は言葉を書き終えると、写真 2−3 のようにビデオカメラに向かって手を振った。この頃、研究室を出るとき、母親に「バイバイは」と促されるとこれと同じ手つきをしていたので、これがバイバイであることは、間違いないし、この場面には母親の「あっ、バイバイした」という音声もあわせて録音されている。この行動もまた他者の意図に対する推測が含まれているとも言え、「心の理論」の欠如やその獲得の遅れと言った説明が的を射ていないことを示すものである。

T 君は、現在も対人関係において、視線によるコミュニケーションを行うことはほとんどない。しかし、T 君は、祖父母両親、二人の妹との間に豊かな対人関係を築き上げて生きていると私には見えるし、ご家族もまたそのように感じて暮らしていらっしゃる。

今回、写真や言葉の掲載のご許可を得るために問い合わせをしたところ、快諾のお答えとともに、最近の様子が簡単に書かれていた。「先日くら寿司に行った時、いつも食べない海老天うどんを「こっち！こっち！」と何度も指差ししていて、疑いながら注文したのですが、本当にペロリと食べてしまいました。自分の意思が伝えられて嬉しそうでした。」

T 君のご家族からすると、コミュニケーションや対人関係について、「人の気持ちがわからない」というような言い方が存在すること自体がたいへん奇異なことと感じられているのではないだろうか。

斉藤こずゑさんへの謝辞

斉藤こずゑさんは、大学 2 年生の秋に始まった教育心理学実験の第 1 回のチューターでした。この時は、錯視に関する実験でしたが、教育心理学の専門科目の最初の入り口でしたから、鮮やかに記憶しています。その時に苦労してレポートを出してから 43 年の時間が流れました。今回は、それから 43 年後に斉藤さんに提出するレポートでもあります。斉藤さんの研究領域である発達心理学の領域に、ルールをわきまえずに土足で踏みこむようなものになってしまいましたが、最終レポートとしてお読みいただければ幸いです。

長年にわたるご指導ありがとうございました。

参考文献

柴田保之（2015）『沈黙を越えて―知的障害と呼ばれる人々が内に秘めた言葉を紡ぎはじめた』萬書房

K・スミス (2018)『ダウン症をめぐる政治』明石書店
（原著：Smith, K(2011), The Politics of Down Syndrome, Alresford:Zero Books）
中島昭美(1977)『人間行動の成りたち―重複障害教育の基本的立場から―』
（財）重複障害教育研究所研究紀要第 1 巻第 2 号
S・バロン＝コーエン(2002)『自閉症とマインド・ブラインドネス』
（原著：Baron-Cohen, S(1995), Mindblindness: An Essay on Autism and Theory of Mind, The MIT Press）
東田直樹(2007)『自閉症の僕が跳びはねる理由』エスコアール
東田直樹・山登敬之(2016)『社会の中で居場所をつくる　自閉症の僕が生きていく風景＜対話篇＞』
ビッグイシュー日本